非農家連携

07

川古集落営農組合

武雄市川古

ふるさとを守る
若いチカラの種
未来に向けて育てていく

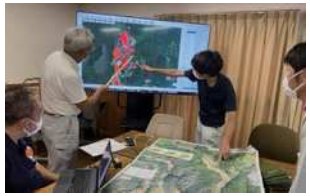
キッカケ

武雄市若木町の4集落（川古山中・上宿・皿宿・下村）で構成された川古集落営農組合。農家の高齢化や後継者不足で不耕作地が年々増加するなか、ふるさとの農地や景観を維持することが大きな課題に。「いつまで営農できるのか?」、「非農家も農地を守るために協力してくれるのか?」などの悩みや不安を抱えるなか、同組合では若手が地域農業に参画しやすい仕組みづくりを令和2年から段階的に進めています。

組織概要

川古集落営農組合が、新しい担い手として注目したのは地元消防団。災害時にリーダーシップを発揮する存在で、地域コミュニティの要でもあります。団員は会社員や自営業などさまざまな仕事を持った人々。地域に密着して住民の安全を守るのはもちろん、こどもたちの体験学習を目的とした小学校の学習田では作業のお手伝いもしています。そんな消防団に「地域の農地を維持するため、農作業に協力できるか?」とアンケートをしたところ、35名中9名の協力が得られました。

中山間地域での挑戦



- **座談会で地域の課題を棚卸し**

  活動のキックオフは、4集落から農家と非農家104名が出席した座談会。将来の不安や悩みを洗い出し、農地を守るための課題を可視化。

- **「Z-GIS」を使って みんなで情報を共有**

  圃場と電子地図をひもづける、営農管理システム「Z-GIS」を導入。組合員同士が、圃場の位置や営農情報などをスマホで共有。

- **地元消防団の有志が オペレーターとして農作業に協力**

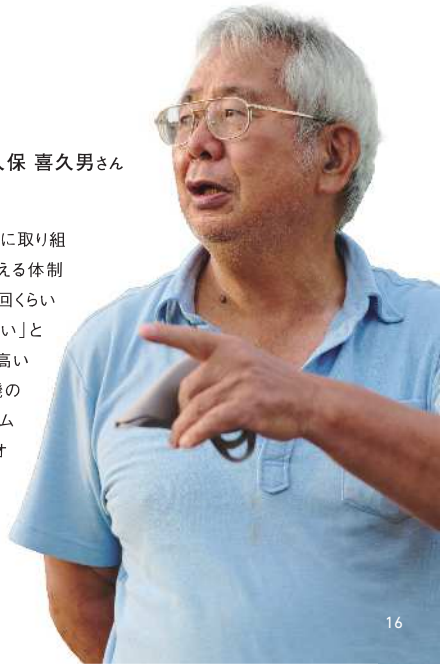
  田植えや稲刈り、大豆の播種などは、消防団所属の若手がオペレーターとして協力。参加しやすいように作業内容や日当を明確化。

つながり

取り組みを進めていくなかで、意外な助っ人も生まれました。「65歳で定年したのをきっかけに、オペレーターとして協力してくれる人達が出てきたんです」と久保さん。若手だけではなく経験豊かな協力者も増え、人手に困ることなく作業を進めることができました。「ただし5年後、10年後を考えると、若手の育成は大事なこと。“誰かがしてくれる”、ではなく“若木の土地は自分たちが守る!”という意識を持ってほしい」と切に願っています。

耕す未来

地域課題の発見と目標設定で、段階的に取り組んできたものの、「“みんな”で地域を支える体制づくりを進めていきたいからこそ、年に3回くらいは4集落が集まって意見交換を行いたい」と久保さん。また、スマート農業に関心が高い若手が多いので、トラクターや田植え機の研修だけでなく、営農管理システム「Z-GIS」や栽培管理システム「ザルビオ※」などIT技術を活用する講習も検討しています。

※AI分析で、圃場ごとに最適な作業時期を提案するなど初心者から上級者までサポート

久保 喜久男さん